

あとがきにかえて

クリストの出発点「梱包された缶」からアンブレラ伝説の誕生まで

今回のクリスト展は、クリストの初期の作品、すなわちパリで初めて缶をラップした作品(1958年)から、ニューヨークに移り住み始めた頃の作品「ストア・フロント、プロジェクト」(1964年)まで、12点の作品を展示し、ご覧いただくものである。ただ、このうちの1点「梱包された瓶」は最近の作品(1986年)であることを申し添える。

当画廊のクリスト展も回を重ね、今回で6回目を数える。因みに最初から記すと次のとおりである。'82/4、ドローイング・コレージュ展、'84/4、梱包されたポン・ヌフ(パリのプロジェクト)、'86/10、梱包されたライヒスターク(ベルリンのプロジェクト)、'88/1、アンブレラ(日・米のジョイント・プロジェクト)、'90/11、第2回目のアンブレラ。今回はアンブレラ・プロジェクトの実現を記念してクリストの最初期の作品を展示するものである。30年前の作品をまとめてみる機会は極めて少ないのでクリストのファン、研究家はもとより現代美術の愛好家の皆さんに喜んでいただけるのではないか、と秘かに思っている。

この展覧会のためにカタログを作成したが、展示し収録した作品のそれぞれについて、クリストとジャンヌ=クロードに、その制作過程、当時の状況、エピソード等を語ってもらった。その取材ならびにとりまとめの労をとっていただいたのは、クリスト研究家の柳正彦氏と夫人のハリエットさんである。カタログには、パリ時代の若きクリスト夫妻の珍しい貴重な写真も収録されている。とくにジャンヌ=クロードは大変魅力的なので、私は思わず感嘆の声をあげたものである。アンブレラ・プロジェクトで超多忙のなか、このカタログのために時間を割いていただいたクリスト夫妻そして柳正彦夫妻に深謝申し上げる。

クリストの初期の作品を実際に見て、カタログでクリスト夫妻の話を読むと、30年前のパリでしごとをしていたクリストの姿が自然と浮かび上がってくる。ご存知のようにクリストはブルガリア人で、ソフィアの美術学校で学んだ後、チェコのプラハに移る。滞在中に例のハンガリー動乱が勃発、東側の体制に嫌気がさし1957年1月ウィーンに亡命する。そして翌58年3月、パリに到着する。もちろん、この22歳の若者には物質的なものは何もない。まず食べなければならない。その生活の糧にクリストは肖像画を選んだ。ご存知のように彼のドローイングは実にうまい。ソフィアの美術学校時代、成績が抜群で、モスクワ大学へ留学の話もあったというくらいだから、腕前には自信があったに違いない。クリストはジャンヌ=クロードのお母さんの肖像画を描いた。それがきっかけで2人は結ばれることとなったのである。何と2人の誕生日はともに1935年6月13日というから運命的なものを感ずる。奇蹟のコンビである。

このカタログでクリスト夫妻はさまざまなエピソードを語っている。肖像画のしごとをあっせんしてくれた美容師のこと(どうも肖像画の対象は主にご婦人だったらしい)。梱包された缶の種類は何であったか? 最初にその作品を買ってくれたのは誰であったか? 倉庫の家賃が払えなくて、怒った大家が、貴重な作品をすべて捨てたこと(何というモッタイナイことをするのだ!)。ヤン・フォスとクリストの友情(私とは旧知の画家ヤン・フォスと同じ屋根の下で暮らしていたのだ、何と美術の世界は狭いことか!)。クリストはいかなる動機でパリからニューヨークへ渡ったか? 等々そこには一人の若い作家がひたむきに生きて行く姿が見えて感動的である。

ある日、1958年某月某日、クリストは梱包した缶を部屋に置いて感動したのである。周囲の空間が変貌していくのを感じたからだ。空間が変わる、これはクリストのしごとの根本的なコンセプトなのだ。アンブレラ・プロジェクトにより茨城県北の里川流域の空間は変貌する。

さて、クリストは現在「アンブレラ：日本とアメリカ合衆国ためのジョイント・プロジェクト」の実現を目前に控え、超繁忙の毎日である。このプロジェクトは茨城県とカリフォルニア州ロサンゼルス近郊に、それぞれブルーの傘1,340本、イエローの傘1,760本、計3,100本を、同時に、10月8日から3週間立てるものである。湿度の高い日本はブルー、乾燥したアメリカ西海岸はイエローと色彩は異なる。巨大な傘(高さ6m、直径8.66m、重さ203.2kg、支柱はアルミ製、傘の布地はナイロン製)が茨城県北の里川流域の山峡19km、ロサンゼルス近郊のハイウェイをはさむ丘陵29kmにわたって、ある地点では密集し、ある場所では拡散し、まるでベドウイン族のパオのように、点々とリズミカルに連なるのである。まず、これは実際に見ないことには始まらない。クリストは実際に傘のなかに入ってほしい、そして周辺を歩いてほしいと言う。

このアンブレラ・プロジェクトは構想から実現に至るまで6年余の歳月を要した。関係者との気の遠くなるようなネゴシエイションの積み重ねが隠されている。このプロジェクトの実現に要する費用は35億円に達すると言われる。大事なことは、この費用はすべてクリストの腕から生まれるドローイング、コラージュ、版画等を売却した代金で賄われていることである。スポンサーなしである。10月3日から始まる傘の設置及びオープンの作業には、日本で800名、米国で1,000名が参加するという。クリストはこれら作業員にアルバイト料を支払う。10月8日から始まるこのプロジェクトは3週間の展示後、直ちにキレイに撤去され、里川流域はもとの静かな自然の姿に戻るのである。この時点でこのクリストのアンブレラ・プロジェクトは完結するのだ。

クリストのこれまで数多く実現されたプロジェクトのなかでも、このアンブレラ・プロジェクトはそのスケールが桁はずれに巨大で、空前のものとなった。クリストにとっても戦後の美術にとっても、それぞれの歴史のなかで画期的なモニュメンタルなしごとして後世に残るであろう。このしごとが日本で行われたことを私は喜ぶ。

後世に残ると言えば、里川流域には伝説が残るであろう。100年、300年、500年、1,000年の後、人間が存在する限り、かつてこの里川流域の山峡に、1,300本余りの

巨大な青色の傘が林立したという伝説が残る。現実にこの光景を見、クリストに会った子供たちは、やがて父母となり、祖父母となって、その子や孫にこの光景を語るであろう。そしてその子や孫たちもまた次代に語り継ぐであろう。クリストはまさしくアンブレラ伝説の主人公として、その名は永遠に記憶されるであろう。永劫の時間のなかで、3週間はまたたきのようなものである。アンブレラという「もの」は消え、空間を一変させた行為の記憶が永遠に残るのだ。クリストのこの一時性、瞬時性こそ、彼のしごとの本質をなすものなのだ。

そのクリストに昨日(9月14日)、水戸市の芸術館で会った。クリスト展(ヴァレー・カーテンの全貌とアンブレラ・プロジェクトのためのドローイング)のオープニング・パーティの席上である。クリストは大変元気で、私はうれしかった。スケジュールの約束をしようとすると、クリストは、申し訳ないがアンブレラ・プロジェクトのことで頭が一杯で、さきのことは約束できない。何しろ、プロジェクトの期間中何が起こるか分からぬ、それに3週間の期間中、ロスと成田の往復で飛行機に乗っているのが10日間だし、ジャンヌ=クロードと一緒にいるのが日・米それぞれ1日半ずつしかないという超過密スケジュールですからね、という。生きていたら、会いましょう、クリストはいたずらっぽく笑ってそう答えた。成功を祈る、私はそう言ってクリストとかたい握手をかわした。

1991年9月15日

佐谷画廊

佐谷和彦